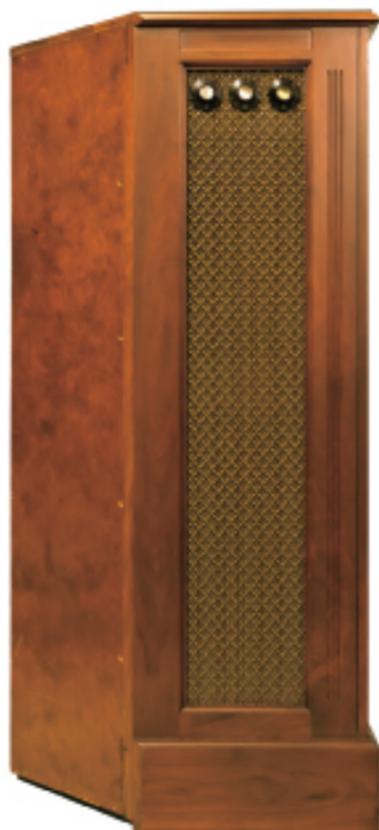




46cmウーファーを搭載したバックロードホーンで増幅された低音は両サイドの縦のスリットから斜め前方に放出される。左側のスリット上部にはアッテネーターが3個取り付けられている。



本体は美しい外装の外箱とユニットが装備されたクリプシュ型バックロードホーンの中箱の2重構造となっている。フロントはヨーロッパの高級家具調のキャビネットにアーノルド・コックのデザインの真鍮の全飾りが施されている。当時キャビネットの色はマオガニーの他にブロードと呼ばれる少し黄色い仕上げのタイプもあった。

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのヴィンテージオーディオ

ヴィンテージといえば、アルテックやタンノイなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ビンテージ・ショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのヴィンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。ここ数号は大型コーナースピーカーを連続して登場しているが、JBLの初期型ハーツフィールド、TANNOYの英国オリジナルAutographに続き、今回はElectro VoiceのPatrician 4をご紹介します。

本文 / 田中伊佐寛
製品解説 / 岡田圭司(アトリエJe-tee代表)
撮影 / 小林新彦(彩虹舎)

Patrician 4

Patrician システムは1952年頃に発表された Electro Voice 社のフラッグシップモデルの4ウェイスピーカーシステム。その後システム構造や搭載ユニット、外観デザインが変更されながら、最初期のThe Patrician、Patrician 4、Patrician 600、700、800と続き、1983年に開発された最終型の Patrician 2 まで生産された。The PatricianとPatrician 4 は正面デザインもほぼ同じ。共にクリプシュ型の折り返し型バックロードを採用し、46cmウーファーを搭載した4ウェイシステムだが、特に Patrician 4 は重要な中音域の音色が滑らか。繊細なフェリックスダイアフラムを使った828 / HFDドライバー が2本とT25ドライバー / 6HD ホーンが搭載されており、その荘厳で豪華な外観と圧倒的なスケールのオーケストラサウンドの再生音は当時から他にその地位を許さなかった。

Electro Voice

1927年にアメリカ ルイジアナ州のサウスベントに AL Kahnと Lou Burroughs の2人によって設立される。当初はラジオのメンテナンスサービスがメインだったが、当時その高い技術力によって競技場で使うPAシステムを開発。このシステムが Electro Voice と呼ばれたことが社名の由来となった。その後マイクロフォンの開発で高い評価を得て急成長していき、1940年台頃からは家庭用のハイファイオーディオのスピーカーメーカーとして大小さまざまなタイプのシステムやユニットを開発していく。現在は特にPAスピーカーの分野で有名なメーカーとして知られている。

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのヴィンテージオーディオ

Electro Voice



Patrician 4の当時のカタログもストックしてある



正面の真鍮飾り。バーを止めるビスの中に飾りネジが4本あり、それらを外すと正面の真鍮飾り部分全体を前に外すことができ、それぞれの4ウェイ用ユニットはこちらから装着できる



正面のロゴマークはThe Patricianと印字されている



当時の製品ステッカー。紙製で60年ぐらいここに付いている。モデル名のPatrician 4の最後の4の部分が残っている



当時はまだモノラル再生の時代なのでコーナータイプとして開発されており、後ろの両サイドが斜めにカットされている。3枚のリアパッフルを外すと中に本体キャビネットが見える仕組み。

弦楽器のボディのように響く
三日三晩でも聴いていらられる

大型スピーカーを惹る漫遊はまだまだ続く。

昨年度にヴィンテージ・タンノイを取材させてくれたMさんが、新しいオーディオルームを地下に作ったという。その部屋は30畳近い十分に広い部屋だったため、なんでまたと思いつつ、再訪してみるとその新しい部屋はもっと広大でちよつとしたシアターのような感じ。高さは5mもある。地下1階の床をぶち抜き、地下2階とつなげたという信じられないオーディオルームだった。

そこにタンノイを入れるのではなく、また別にシステムを組んでいる。部屋の両側に立っていたのはエレクトロボイスのバトリシアンIVだった。18インチのウーファーを入れたスピーカーがこれほどに小さく見えたのは初めてだ。それだけ部屋が広いわけだが、その環境が極めて当を得ていることをすぐに実感することになる。

ムタによるチャイコフスキー「ヴァイオリン協奏曲」がかかる。指揮がカラヤンとくればオーケストラはウィーン・フィル。ちなみにバトリシアンを鳴らすアンプはマフケンツッシュでプリがC22で、パワーがM1-75だ。

つややかなヴァイオリンが中央に立ち上り、それを包むようにしてウィーン・フィルが部屋を響かす。これが初めてではないが、ああこれが本物の音なのだ

と思った。4ウェイの5スピーカーで、形状が複雑なホーン構造になっているが、そういうことは感じさせず、すべてのユニットの音がうまく空気に溶け込んでいた。ひとつの大きなフルレンジスピーカーのように統括されている。リスナーまでのたつぷりした距離や大きな部屋がそうさせているのだろう。

続いてマイルス・デイヴィスの1958年のセッションから「オン・グリーン・ドルフィン・ストリート」。デリケートなユニット・トランペットはエッジがシャープ。サクソスのソロにも芯がある。あたかもエンクロージャー全体が楽器のボディのように響く。このトーンが最高に気持ちいい。

最後はヴォーカルで締めくくるところにした。ベギーリーの「フランク・コビー」は妖艶。濃厚なリスナーは求めがたどと思うが、想像以上に歌声に無駄な力(脚色)が入っていない。社名に「ヴォイス」と入れているから、やっぱり声がいいのだというベタがことを考えてしまった。すごくナチュラル。三日三晩でも聴いていられる。

このバトリシアンは以前、どんな境遇で鳴っていたかは知るよしもないけれど、この部屋に入っておそらく水を得た魚のようになったのではないだろうか。それ相応の住みかを定めたヴィンテージ・スピーカーは底知れない実力を発揮する。